
カラスと悪魔

夏岸希菜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラスと悪魔

【Nコード】

N8009P

【作者名】

夏岸希菜子

【あらすじ】

中学二年の保香^{ほのか}のクラスに転校してきた真人^{まひと}は、カラスを寄せ集める体質。しかし、周囲に現れるのはカラスだけではなかった。保香の前には、真人を魔王呼ばわりする自称天使まで現れて……。

* 各話あとがきのなものを活動報告に載せています。大したことは書いていないことが多いですが、よろしければそちらもどうぞ。

朝の屋上

保香は屋上へ向かっていた。特に用事があるわけではなかった。ただなんとなく、屋上に向かっていた。

昇りきったところに屋上への扉がある。きいっと音を立てて、保香は扉を開いた。すると、鳥が一斉に飛び立つ羽音が響く。その音のほうを見ると、何十羽ものカラスが今まさに飛び始めたところだった。

「ああっ、逃げちゃった……」

その黒い羽の奥から声がした。そこには人が立っていた。右手の先に一羽のカラスを止めている。保香は、その姿を見て言った。

「真人くん？」

三日前、真人は保香のクラスに転校してきたばかりだった。こんなところでカラスの大群と一緒に過ごすなんて、変わり者に違いない。

「おはよう」

真人は言った。変わり者らしさを見せない友好的な挨拶である。

「お、はよ、う」

彼の笑顔と右手のカラスを見比べながら、保香はぎこちなく返答した。

「こんなとこ見られるなんて思わなかった。えっと、あのカラスたち、みんな知り合いなんだ」

真人が、保香の求めている説明を始める。カラスと知り合いだなんて普通は言わない。

「人が来るとたいいていみんな逃げちゃうのに、こいつは君のこと平気らしい。……触ってみる？ 怖がらなくてもいいよ、おとなしい子だから」

保香は懸命に首を横に振る。動物は、ちょっと苦手なのだ。

「そう……そうだよね」

少なからず真人は落ち込んだようだった。

「あ、真人くん。カラス、好きなの？」

「別に」

意外な答えだった。

「特別好きなわけでも嫌いなわけでもないよ。だけど、物心ついた頃から一人でいると集まってきた、今じゃもう慣れた。カラスってさ、悪魔の使いとか死の使いだとか、よく言うだろ。カラスが集まる僕のこと、みんな気味悪がって避けようとする。それで人間よりカラスと過ごす時間が長くなって、変なスパイラルにはまっちゃってさ」

真人は哀しげに目を伏せる。保香は真人が気の毒に思えてきた。

「だっ、大丈夫！　世界は広いよ。カラス好きなんて、大勢いるんだから……きっと」

保香は励ましたつもりだったのだが、大した効き目はなかった。

「それ、本気で言っていないだろ」

しかし、真人の表情は、少しだけほころんだようだった。

「まあ、クラスメイトに嫌われたくなければ、もう僕とは関わらないほうがいいよ」

既にクラスの輪の中に入るのを諦めているようだ。転校する前に、何かあったに違いない。

「本当にそれでいいの？　ひとりぼっちじゃ、さびしいよ」

気付けば保香は真人に向ってそんなことを言っていた。

「お節介だね。仲間に入れないことよりも、親しくしてくれた人がまた同じ目に遭うことのほうが、ずっと辛いんだ」

カラスが真人の手から離れ、保香の足元に着地した。

「でも」

「友達なんていない。いたって不幸になるだけだ。もう、話しかけないでくれ。巻き込みたくないんだ」

そう言い放つと真人は保香の脇を通り抜けて屋内に入ってしまった。先ほどのカラスは真人を追いかけてようとして翼を広げたが、カラス

が飛ぶ前に真人は扉を思い切り閉めてしまった。

「ばたん、と音がすると、カラスは驚いたように羽を動かし、保香のを見た。目が合った。

「あなたたち、どうして真人くんに付きまとうの。何の恨みがあるっていうのよ」

言ってもどうしようもなかったが、保香はカラスに話しかけた。

カラスは一声あげると、そのまま屋上から飛び立った。

カラスの死（前書き）

人によっては残酷な描写と思われるかもしれませんが、一応ご注意ください。

カラスの死

その日の授業中のことだった。窓際後方の真人の座席からは、廊下側前方の保香を見ることができた。しかし、保香が真人を見るためには、振り返らなければならなかった。

保香がちらりと様子をうかがう。

「う、ううわっ」

保香は声を上げた。これではさすがに、真人や教師だけでなく教室中の視線を集めてしまった。

「どうしたんですか、大谷さん」

担任の牧野が保香に尋ねた。さっきまで保香が見ていた方を向いて牧野も「きゃっ」と悲鳴を上げる。

真人は不安げにあたりを見まわした。

「何ですか……？ みんなでこっち見て……」

窓の外にはたくさんのカラスがベランダの手すりやら何やらに止まって巨大な黒い塊を形成している。

「あ、カラスですか。そんな、驚くことありません、よね？」

「北原くん、カラスは普通こんなにいっぱい集まったりしないですよ」

真人にそう言いながら牧野はベランダの窓を開けた。一羽のカラスを除いて、すさまじい羽音を立て、鳴きながら飛び去る。残った一羽のカラスは、牧野の開けた戸の隙間から教室に入り込んでしまった。

ざわめきと悲鳴で教室内が満たされた。カラスは羽を休める場所を探しぐるぐると廻る。中には怖がって泣いてしまう子もいた。カラスはやはり、真人の机に降り立った。そして、真人に向かって鳴いた。……今朝初めて見た、人懐こいカラス。そのことだけは判った。

カラスがもう一度鳴く。

「黙れ」

確かに真人の声だった。だがその声は、朝保香に発したもののより万倍も冷たい響きをしていた。

「二度とこの俺の前に姿を現すな」

真人の手が、カラスの首を捕まえ力をこめる。カラスがくつたりとしていく。

「北原くん……？」

牧野はそれしか言わなかった。保香もほかの生徒たちも、真人の残虐な行為を目の当たりにして無言になってしまった。

「あ……」

真人は牧野を見て、次に自分の手の中の鳥の死骸に目を落とした。

「えーと、これは……」

その声に先の冷たさはなく、震えた小さな声だった。

朝にはその手に止まっていたカラスが、今では同じ手によって命を奪われ動かない。保香には今起きたばかりの出来事が信じられなかった。気分が優れないことを訴え、数人の生徒が保健室へ行ってしまった。

「北原くん、自分がどういうことをしたのか、わかっているのじゃないよね」

取り返しのつかないことをしたのだと、わかってはいる。

「先生、あの、僕は」

普段穏やかな牧野の目が怒っていて、真人は弁明を諦めた。

「……してはいけないことをしました。もう二度としません」

真人は自分のしたこと全てをはっきりと覚えていた。だが、なぜそのような行動をとってしまったのか、他人のこのように全くわからなかった。

授業終了のチャイムが鳴ると、牧野は一言だけ話した。

「これで授業をおわりにします。北原くん、大谷さん。昼休みに、そのカラスを埋葬しに行きましょう」

大谷さんこと大谷保香は耳を疑った。

「私ですか？」

「そうですよ。授業中に大きな声を出したでしょう？」

牧野はそう答えた。

カラスのおはか

真人と保香は校庭の隅で牧野を待っていた。グラウンド側からは賑やかな声があるが、こちらは裏手なので人気もない。

「……先生来ないね」

真人は話しかけるなど言ったが無言はきつい。さすがに真人も無視はしなかった。

「忙しいんだろうけど、授業中に堂々と鳥を殺した男子と女子を二人きりにするか、普通」

保香がいるせいか、それとも真人が死んだカラスを手になっているせいか、真人の周りにカラスはいなかった。

「もうしないって言ったの信用してくれたんでしょ。そんなこと言うなら、なんでカラスなんか殺すのよ？」

「……気付いたらやってた。ときどき正気を失って物を壊すことがあったけど、……なんかだんだんエスカレートしてるみたいで、生き物を殺したのなんて初めてで……」

真人は俯く。今度は人間だったらどうしよう。今、例の状態になったら止めてくれる者はいない。したいとは思ってもいないが、しない保証はできない。真人は、自分から徐々に人間らしさがはぎ取られ、自分のすべてを乗っ取られるのではないかと恐れていた。

「転校のストレスかもしれないし、あんまり気にしすぎも良くないよ！ ほら、カツとなつてるときって後悔するようなことばかりやっちゃうでしょ？ きつとそれだって」

「そうだったら良かったんだけど」

保香もそうであってほしい。手違いで殺されてはかなわない。

「あ、牧野先生」

牧野が、三本のスコップと四角い材木を持って歩いてくる。

「牧野先生！ 遅いです！ もうお昼休み終わっちゃいますよ！」

保香は声を張り上げた。牧野が走り出す。

たどり着いた時には牧野は息を切らしていた。体力がない。保香は牧野に尋ねる。

「どうしてスコップが三つもあるんですか？」

「え？ ああ、これね。私と北原くんと大谷さんのぶんよ」

「ひとつあれば十分ですよ。そんなにあつたらむしろ邪魔です。僕がやりますよ」

真人が牧野からスコップを受け取り、校庭の土に突き刺した。

ある程度の深さまで掘ると、そこにカラスの亡骸を横たえて土を被せた。カラスの墓のところだけ盛り上がっていて、土もむき出しになっていた。

「あれ、大谷さんは？」

牧野の持ってきた木の板には、「カラスのおはか」と油性マジックで書かれていた。それを墓標代わりに突き立ようとしていた牧野は、保香の不在に気付いた。土を掛ける時には確かにいたのだが、見当たらない。

「大谷さんなら……」

「私はここです」

保香はすぐそばの茂みの陰にいた。牧野は安堵の息をついた。

「ああ、よかった。心配したじゃない、なにしてたのよ」

保香は顔をしかめた。牧野が木片を立てる作業を続行する。

「なにつて、さっき言いましたよね？ お供えです」「大丈夫ですか？」

真人は牧野が心配になってきた。牧野の頭は本当に大丈夫なのか。保香の手には、小さな花をつけた雑草が握られていた。もったきれいな花があればよいのだが、花壇の花は摘めないで雑草だ。時間があればコスモスを摘みに行けるのだが。

保香が墓前に花を供えると、三人で手を合わせた。

そして祈る。カラスが安らかに眠れるように。

もう二度とこのような過ちが起きないように。

真人の放課後

放課後。真人はまた一人きりになった。教室には誰もいない。どこからともなくカラスが四、五羽出てきて、真人を取り囲んだ。室内にカラスがいることに、いちいち驚くことはなかった。きっと窓かどこから侵入したのだろう。真人にとっては日常茶飯事のことだった。

突然、真人の目の前に黒マントの男が現れた。男は深く礼をした。一人でいるとき真人の側へ寄ってくるのは、カラスだけではなかった。現れたのは悪魔だった。

「おひさしぶりです、魔王様」

真人はその名で呼ばれることにも慣れてしまっていた。

「リウス……今度は何の用？」

真人が尋ねると男は口を開いた。

「本日の昼のことです。天使の奴がカラスを操りあなたの周りに付けていました。手をお下しになった際、人間どもがあなたを疑った可能性があります。天使どもに情報が漏れるとお困りでしょう」

真人はリウスの言葉を途中で切る。

「じゃあ、あれはやっぱりエインの仕業だったんだね」

真人の中には「もう一人」が眠っている、らしい。これは、真人の前にとどき現れるリウスという悪魔からの受け売りで、真人自体にはあまり自覚がないが、それが魔王で、名をエインという。

「はい、決まっているではないですか。……話を戻しますよ。目撃した人間の処分ですが、あの場にいた者すべて抹殺ということですよ。正しいですね？」

リウスの言葉で真人は大きく反応した。急に動いた真人から、カラスは羽ばたいて距離を置いた。

「っ！ ダメだ、そんなの。殺してはいけない！」

リウスは魔力で縛られているらしいから、真人がダメと言えば何

もできないはずだ。

「お言葉ですが魔王様。人間など存在価値はゴミ同然です」

リウスはさも当たり前といった様子だが、真人は腑に落ちない。

「……僕も人間、だよな？」

「いいえ、あなたは、……邪魔が入ったようですね。それではまた後日」

答えも途中のまま、リウスは姿を消した。真人は無意識にカラスを撫でながら、呆然としていた。

まもなく、教室に人が入ってきた。担任の、牧野優子だった。彼女は入ってくるなり小さく悲鳴を上げた。

「ど、どどどとしてカラスがこんなに、教室につ！」

逃げまどうカラス、慌てふためく牧野。

動揺する牧野に真人は説明を試みた。

「落ち着いてください。僕はカラスを寄せ集めてしまう体質なんです。じっとしていれば害はありません」

「き、北原くん。あなた、変わってるのね」

牧野がそう言うので、真人はどきりとした。普通ではないのはわかってる。だが、ついさっきリウスが言いかけた言葉が、自分は人間ではないというのではないか、気にすればきりがなかった。

「……そうですか？」

「あつ、ごめんなさい！ 悪い意味はないのよ」

「いえ、気にしてないですよ。ちよつと嫌なこと思い出して」

どうも、真人は考えていることが顔に出やすいらしく、牧野が傷つけたと勘違いして謝る。

「そう、北原くんにお話ししておかなきゃいけないことがあったんだけど」

「あー、今日のアレですか？」

今日のカラス事件が問題行動として注意を受けるのだろうか。

「え？ あ、そんなこともあったわね……」

違うのか。

「ちゃんと反省もしてるようだし、私は別に報告の必要を感じてないんだけど。んー、でもあとでいろいろ文句言われると怖いから、ご両親さんには事故で過失で猛反省済みって説明しとくわ」

「あ、ありがとうございます」

牧野は不謹慎で不安だが、自分のこととなるとありがたい。自分がおかしいことを、親には知られたくない。

「で、何の話でしたっけ」

「大事な話じゃないんですか？」

「そうそう、部活の話よ。全員強制入部だから、必ずどこかには入ってね」

「……どこでもいいです。先生はこの顧問ですか？」

そこに入ろうと思い、真人は聞いた。

「女子テニスよ」

入れない。

「とりあえず、見学期間二週間あげるから、決まったらこの紙に記入して提出してね。じゃあ、また明日！」

「さようなら」 牧野は真人に紙を押し付け、戸を開け放して出ていった。

保香の放課後

帰宅中だった。保香はいつも、小学校からの友人美那と一緒にのだが、今日は違った。風邪で休みだったのだ。美那は「自分の前世は天使で、悪魔との禁断の恋をして地上に落とされた」とか言ってしまうメルヘンな頭の持ち主なのだが、それでも風邪は引くらしい。「もしもし、すみません」

幼い声がして、振り返ると白いワンピースに身を包んだ少女が立っていた。背の低い保香よりも少し小さい。小学生だろうか。

「聞きたいことがあるの」

少女は保香を真っ直ぐに見つめて言った。

「どうしたの？」

保香は心配になった。迷子なのかもしれない。

「エインのことを知っているだけ教えてちょうだい」

「……エイン？ ごめんね、私、わからないの。他の人に聞いてくれる？」

保香は困った。話が見えない。

「エインを知らないですって？ これだから人間って……。エインは魔王の名よ！」

少女は怒っていた。

「そんなこと言ったって、私、魔王のことなんて知らないもの」

保香はもつと心配になった。この子は魔王なんて怪しいものの存在を信じているのだ。

「ああ、あなたはあたしの話を信じていないのね！？ あたしは天使よ！」

美那と気の合いそうな子だ。

「あたしはね、今朝あなたがエインと屋上で密会したのを知ってるんですからね！」

「今朝？ 確かに屋上にはいたけど……」

どうして知っているのだろう。

「エインは人間の姿を借りて生きているのよ！ 名前も人間のものを使っているはずだわ。確か、北原真人とか名乗っていたわね」

少女は真人を魔王だと言った。嫌がらせだろうか。それにしても、話が大掛りすぎる。

「さあ、もうわかったでしょ。エインについて、教えなさい」

保香を急かす。保香が答えないと、少女はすぐに苛立った声を上げた。短気な子だ。

「あなた、悪魔を援助する気なのね！！」

「真人くんは悪魔なんかじゃないよ？」

女の子は笑った。

「あなたがそう思いたいのもわかるけど、エインは魔王なの。あなたみたいなただの人間に見抜けるはずがないのよ」

「どうして、真人くんを悪く言うの？ もしかして、前の学校でも何かあったの……？」

「あら？ エインはもうこっちで問題を起こしたの？ ずいぶん早いご登場じゃない」

保香は、この少女が言う「魔王」が何のことだか解りかけてきた。この子は真人の普通じゃない状態をそう呼んでいるのだ。

「ねえ、私、どうしてあなたがそんなに真人くんを嫌っているのか、よく解らないんだけど……一度本人とよく話してみるべきだと思うの」

そうすればこのおかしい誤解も解けるに違いない。

「ときどき変なことしちゃうって、本人も気にしてたみたいだし、普段は意外と普通の人だよ？」

我ながら名案だ、と保香は思ったのだが。

「そんなの関係ないわ。北原真人が人間だったとして、それが何になるっていうの？ あたしたちはエインさえ抹殺できれば人間の一人や二人死んだって気にしないわ」

少女の言葉に保香は絶句した。

「あたしたちの邪魔をしたらあんたの命だっただけじゃ済まさないわよ」

「……人殺しはいけないことでしょ？　そのどこが天使ですって？」

保香には、真人よりこの少女のほうが悪魔に思えた。自分の知っている天使は、こんなじゃない。とても素直で優しいメルヘンチックな趣味の脳内万年お花畑が、天使だ。

「もう帰る、さようなら！」

無性に腹が立ってきて、保香はつかつかと家に向かって歩き出した。

少女は遠くなる保香の後姿を眺めながら呟く。

「天使の話を信用しないとは愚かな人間め。いつか魔王の餌食にもなるがいいさ」

少女は音もなくその場から消え去った。

噂

牧野は変な噂を聞いてしまった。職員室でのことだった。

「牧野先生も大変ですよ。例の転校生、相当いわく付きだそうですね。」

噂好きで有名な教師が牧野に言った。

「大山先生！ 生徒をそんな風に言うなんて良くないですよ！」

「あら、気にならないんですか。どんな『いわく』が付いているのか」

大山はしつこく言い続けた。

「妙な噂があるの。以前いた学校四校ともに共通の噂。それがね、彼の前世は実は魔王で、復讐のため自分を殺した相手の生まれ変わりを探しているとか」

「まおう？ ファンタジーね。本気で言ってるわけじゃないでしょう？」

大山が怪談じみた話し方をするので牧野はふきだした。

「一校だけなら、まあ、中学生特有の妄想かと思うけれど、四校ともに同じ噂があるのが引かかるのよね。それに、この学校にもおかしいこと言う子がいるのよ。北原くんだけ？ その子を二重人格なんじゃないかって私に言ったのよ。突然カラスを殺したんですってね。そんなことする子には見えなかったけど」

牧野も、あのとときの真人と普段の真人はまるで別人のような気がしていた。

「それからもうひとつ。北原くんの在校した学校で必ず、人が死んでるのよ。不審な事故ばかりなの。この学校ではなければいいと思うけどね」

「事故？ それなら北原くんとは関係ないでしょう。ただの偶然だわ」

牧野は言った。いや、本当に偶然だろうか。真人が直接手を下し

ていないにせよ、何らかの関わりがあるのかもしれない。牧野の脳裏に良くない想像がよぎった。

「そうよね。カラスはともかく人間まで殺そうとは思っていないでしょうしね。魔王なんて、あの子を見ていて思いつく言葉じゃないわ。あんなにかわいいカラスたちが魔王なんかには懐くわけないもの！　いつも私が餌付けしてやってるのに、みーんなあの子にベツタリくつついて……カラスの裏切り者っ」

「大山先生、餌付けしてるんですか……？　また問題になりますよ、このあいだは野良猫、その前は野良犬。ご近所から苦情の電話があったばかりじゃないですか」

「じゃあカラスの代わりに愚痴聞いてくれる？」

この人は、毎日カラス相手に話をしていたのだろうか。牧野はその光景を思い浮かべた。寂しい背中、可哀想な大山。解ってくれるのはお前らだけなんだよ、カラス。

「……大山先生友達いないんですか」

「失礼ね！　友達ならたーっくさんいるわよ。三人と、八十羽と十匹くらい」

カラスも友達に入っているのか。何気に人間が一番少ない。

「このあいだは八幡神社でハトと仲良くなってきたんですからねっ」
大山が不憫だ。

「あ、そういえば魔王くん、友達できそう？」

思い出したように大山は言う。牧野は一瞬、何のことが判らなかった。

「大山先生！　生徒のことをそんな風に呼ばないでください！」

放課後の職員室で、牧野が叫んだ。

魔王

朝のことだった。真人は学校に向かっていた。一人でいるのでカラスは自然に寄ってきた。いつもの顔ぶれだ。

人が好奇の目で見る。カラス自体は慣れっこだが、これだけはいくらたつても慣れない。カラスは人が近づくと逃げていくが、大きな音を立てたり走ってきたりしなければ、ほとんどが泰然としている。そんなだから、真人に挨拶をするような人間はほとんどいなかった。

校門に近づくにつれ人の数が増え、カラスが少しずつ離れていく。真人は校門前に立っていた校長に挨拶をして通り過ぎようとした。「ちよつとキミ、待ちなさい」

真人は校長に呼び止められた。

「ペットを学校に連れてくるのは校則違反だよ」
注意を受けて、真人は目を泳がせる。カラスがまだたくさん群がっているのだ。

「これは……勝手に付いてくるんです」
どうしようもないのだ。真人が人間だろうが魔王だろうが命令を聞くわけではない。カラスの知ったことではないのだ。

「きつと餌付けでもしているんだろう。あまりたくさん集まるとまたご近所さん方のご迷惑になるんだよ。もうそういうことはよしなさい」

「はあ、すみません……？」

餌付けをしているわけではないのだが、校長の頭の中では真人がカラスを餌付けして集めたことになっているらしい。

「素直でよろしい。これ以上動物を集められたらうちの学校は訴えられてしまうんでね。頼んだよ……！」 肩を強く叩かれる。校長には校長の苦労があるようだ。

そろそろ解放してはくれないかな、と真人が思い始めたそのとき。

「ぎゃあああああああ！」

大音量の叫び声が響いて、カラスたちが真人から離れていった。

「出たああああっ！」

「牧野先生……？」

聞き覚えのある声に、校門から顔を出してみると案の定牧野であった。

「ああっ、北原くん。それに校長。わわ、私、ついに見てしまいました、ユーレイをつ！ 白い服の女の子が消えたんですよ！？」

腰砕けの牧野は震える声を抑えながら言った。

「もしかして、それって……」

真人は顔を曇らせた。

「天使って名乗ったり、……魔王が何とか言ったりしてませんでしたか？」

「え、ええ。どうして……北原くん何か知ってるのね、あの子のこと。あの子、私にエインを今すぐ追放するべきだと言ったの。意味が分からないわ。エインって何？ あの子はなんなの？」

「……知りません」

真人はゆるゆるとかぶりを振って、嘘をつく。答えたくなかったのだ。

牧野は少女から魔王のことは聞かされなかったのだが、大山に教えられた噂と、真人の言った魔王という言葉が、妙に合致してしまつて耳に残つて離れなかった。

「牧野先生はお疲れなのでは？ 人が消えるわけがないでしょう。さあ、キミも、早く教室に行きなさい。遅刻しますよ」

校長は牧野の言葉を信じなかった。

何故こんなに纏わりつくのだろう。うつとうしい。煩わしい。

悪魔も、天使も、カラスたちも。

ただ人間として暮らしたいだけだというのに、何故邪魔をするのだろう。

天使の話

朝。教室は、登校してきた生徒たちの声で絶え間なくざわざわとしていた。保香と美那も例外ではなく、前後の席に付いてとりとめのない話を続けていた。

「そういえば、保香ちゃん、ノート貸してちょうだい」

「そっか。美那しばらく休んでたもんね。——はい、とりあえず国語と理科」

保香はノートを差し出した。美那はそれを受け取り、大事そうに抱える。

「ありがとー、保香ちゃんっ。この恩は一生忘れないよ!」

ノートごときでいちいち大袈裟だな、と保香は思う。

それにしても、始業までもう間もないというのに、真人は来ていなかった。また屋上にでもいるのだろうか。それとも、学校に来づらくなってしまったのだろうか。

教室前方にちらりと目を向けた瞬間、戸が開いて、眼前に真人が現れる。教室中の視線が真人に刺さり、急にしんとなる。保香は、静かな中、小声で真人に声をかける。少し勇気がある。

「おはよう」

「……」

昨日は自分から挨拶してきたくせに、真人は黙ったままだった。

真人は不機嫌そうな顔で、そのまま脇目も振らず自分の席に向かう。聞こえなかったのか、無視されたのか。

少しずつ、教室に話し声が戻ってくる。保香は無視された気がして納得が行かないでいると、美那が保香をつついた。

「何、あの人。先週先生が言ってた転校生？　なんか感じ悪いねえ」
美那が目を眇める。第一印象がこれでは感じの悪い奴だと思われる。でも仕方あるまい。

「……昨日ちよつと問題があつたから、みんな避けてるみたい、なんだよね」

たぶん、避けられているからぎすぎすした態度を取っているのだろう。あのクラス事件さえなければ真人がこのクラスに馴染めたのだと思うと、保香は悲しくなった。初めから嫌われたくて嫌われる人間なんていないのだ。

「大谷さん、アレはちよつとの問題じゃなかったじゃん」

保香がどうしても好きになれないタイプの人間、隣の席の石田良也が割り込んできて、保香はさらに気分が悪くなった。

「林さん休んでて知らないよな。あいつさ、カラスをみんなの前で絞め殺したの。まじ、ありえねえよ。急に話し方変わるしさ、二重人格なんじゃねえの？ 頭おかしいんじゃないか、つてさ、あいつが前にいた学校の生徒に聞いたんだけど、そしたらあいつ前の学校でもあんな感じだったらしいぜ。しかもさ、実はあいつは魔王だつていう噂があつたつてさ」

「……！」

保香は昨日の少女のことを思い出してしまった。あの子も真人を魔王だと断言していた。

「魔王？」

美那が興味深そうに、その話題に食いつく。

「それホント？ もっと何か言つてなかった？」

瞳を輝かせる美那。美那の笑顔はとても可愛いのだが、その笑顔になるポイントが間違つてはいないだろうか。同類をみつけたと思つて喜んでいるのかもしれないが、保香が昨日話した限りでは、真人にそういう趣味があるようには思えない。

「……林さん、この話そんなに楽しい？」

石田が引き気味に言う。反応が予想外だったのだろう。美那は可愛いから何人も男子が寄ってくるのだが、たいてい彼女の突飛な趣味を知つて去っていく。今回もそんな感じだ。

チャイムが鳴り、牧野が教室に入ってくる。

「みなさん……おはようございます」

この日、生徒に心配されてしまうほどに牧野は元気がなかった。

「どうしたんですか？」

「大丈夫ですか？」

「保健室行きますか？」

飛び交う生徒たちの声。

「ええ、ああ、大丈夫です。ちょっと今朝、変なものを見てしまつて……。突然天使つて名乗る女の子に話しかけられて、今度はいきなり消えて。驚いて叫んだところを人に見られてしまつて……。きつと、やっぱり疲れてるんですね」

締めりのない声で牧野は言った。その日、朝の会での牧野の話は一貫して支離滅裂だった。

教室から牧野が出ていく。保香はそれをすぐさま追い駆けて廊下に出た。女の子の話が気になったからだ。

「牧野先生！」

牧野を呼び止める。

「……どうしたの、大谷さん？」

牧野は立ち止り、振り返った。

「先生、私も、変な女の子を見たんです。自分のこと、天使つて名乗ってました。それで……、魔王をやつつけるとか何とか、言っていました」

本当は、真人が魔王だとか、もっと酷いことも言っていたが、それは伏せておく。

「大谷さんも？　そういえば北原くんも似たようなことを言ってたわ。何か知ってたみたい。ねえ、大谷さん、北原くんから何か聞き出してくれないかしら」

「私ですか？　私、全然仲良くないですよ？」

保香は戸惑った。仲が良いわけではないが、たぶん、クラスの中で割と長く真人と直接話した覚えはある。

「そうかしら。昨日は仲良さそうに話してたじゃない」

「それは、昨日先生が二人つきりにしたからです。先生が聞けばいいじゃないですか」

「私も聞こうと思ったわよ。でも、知らないってしか言わなかったのよ。私には言いにくいことなんだと思うの。大谷さん、頼まれてくれない？」

一応、話し掛けるなと言われている身として、あまり乗り気にはなれなかった。

「……聞けそうだったら聞いてみますけど、期待しないでくださいね」

「本当？　ありがとう大谷さん、頑張つてね」

牧野は保香を励ますように、微笑んだ。

美那と魔王

保香が教室に戻ると、予想だにしないことが起きていた。美那が真人に話しかけていたのである。感じ悪いね、なんて言っておきながら何をやっているんだろうあの子は。美那が執拗に喋るのを、真人は無視することに決めているらしい。そっぽを向いてまるで見えないもののように扱っている。避けられているならともかく、わざわざ話しかけに来た美那まで無視する必要がどこにあるのだろうか。保香は呆れた。

「美那」

保香は真人の席の側まで行って呼びかける。

「何やってんのよ」

「良也くんの言ってた話、本当かなって、本人に確かめに来たの」
真人が魔王だなんて、ただの悪口に決まっている。そんなことを尋ねられて、気分を害するのも当たり前だ。万が一、否、億が一にでもそれが事実なら殺されていて文句は言えないというのに。

「やめなよ、不快に思われるだけだよ。無視されただけでしょ」

「話しかけるなどは言われたけど」

またか。また真人はひとを拒絶しているのか。

「何やってんの、バカじゃないの？ 誰もあんたと話したくらいで不幸になったりなんかしないわよ。話したくなきゃこんな教室の端っこなんてこないわ。いい加減、無視なんかやめたらどうなの。…」

………… あれ？ え？」

保香は教室にいたはずだった。だがここはどこだ。現在、真人と美那、保香がいるのは一面真っ黒の空間だった。

「真人を悪く言わないでやってくれ」

聞き覚えのある声だと思った。しかし、真人の喉から出ているはずのその声は、真人のものではないようだった。

保香は遅れて恐怖を感じた。

「俺はエイン。魔王だ。危害を加えるつもりはない、安心しろ」

安心しろと言われても、この状況で警戒しないほうがどうかしている。

「どうにも、天使の奴等が過激でな、真人が関わった者共を殺しまわっているようなのだ。いくら魔王の生まれ変わりといえど、真人は人の子だ。俺は人間などどうでもよいのだが、真人が悲しむのは忍びがたい」

夢か、と保香は思った。それとも幻覚？

相変わらず、美那は嬉しそうに顔をほころばせている。

「もとはと言えば俺のわがままなのだ。あいつには真つ当な人間として生きてほしい。そう思って真人には何も知らせないできたはずなのだが、うすうす勘付いているようだし、リウスの奴がいろいろと吹き込みやがって……ああ、これは今は関係ない話だな。ともかく、真人はお前たちを巻き込みたくないだけなのだ。許してやつてくれるか」

「うん、わたしは分かったよ。エイン」

美那が優しい声で語りかける。

「あなたが本当は悪い人じゃないってことも、ちゃんと知ってるからね」

「……ラナ、なのか？」

その問いに、美那はゆっくりと首を振る。

「わたしは、林美那。彼女の記憶はあるけど、違うの。もう、ラナはいないのよ」

「そうか」

その漆黒の空間で保香が最後に見たものは、彼の寂しそうな顔だった。

牧野の頭痛

牧野が職員室に戻ると、大山が楽しそうな顔をして近寄ってきた。同じ職場で年も近い女性だということもあって親しくはしているが、訳の分からない人だとつくづく思う。

「今朝、天使に会ったんだって？」

「変なこと言わないでください、そんなんじゃないやありませんよ。いたずらに決まっています。ちょっと疲れてて見間違えたんですよ」

まったく、この大山は理科教師のくせして非科学的な話が好きなようだ。本当に人が消えるわけがない。そう思いたい。

「なんて言われたの？ やっぱり、魔王のこと？」

大山も何か知っているのか。

「あの女の子の素性を知っているなら、もったいぶってないで教えてください」

牧野だって気になって仕方がないのだ。

「魔王退治とか言って例の北原くんの周りをうろついてるらしいのよね。天使なんだってさ」

「いやいや、普通のヒトですよ。きっと、妄想癖でもあるんですよ」

「魔王と天使、どっちの話をしてるんですか？」

大山がおかしなことを聞くので、牧野は眉を吊り上げた。素性のわからない人間のこともなく、生徒のことをそんな風に呼ぶのだけはどうしても許容しがたい。

「大山先生？ 北原くんはいくら誰が何と言おうと人間ですよ、ええ、ご両親ともごく普通の方です。国籍だって日本人ですよ？ 私が言いたかったのは女の子のほうです、ふざけないでください」

日本人だから魔王じゃないっていうその理論はどうかと思うなあ……と呟きつつ、

「そうですねえ、女の子は瞬間移動をするという噂ですよ。すごい

よねー、魔術とか、使える人がうらやましいわー。あと、話によると北原くんを屋上から突き落としたこともあるみたい。ちよつと危ない子なんだよね」

ぺらぺらと、現実味のない内容の『聞いた話』を語る大山。

「大山先生は、一体どこでそんな情報集めてくるんですか」

友達少ないと言っていたのに。あまりまともな内容ではないけれど、いつも噂話のネタを持っている。噂好きの友達でもいるのだろうか。

その質問の回答はきっぱりと断られた。

「企業秘密よ」

怪しい。牧野にとって、大山は本当に謎である。

二年一組担任の牧野優子は英語教師でもある。本日五時間目は、牧野が担当のクラスの英語だ。これまで、ペアワークをしてもらうときは自由に組ませてきた。しかし今回は少し手間取ってしまった。真人の周りが固まってしまうていたのだ。

隣同士組ませれば、あぶれてしまうこともなかったはずなのに。

少し考えれば事前に予想がつくことではないか。本人が反省しているからといって、周りも普通に接するようなできた人間じゃない。大人でさえなかなかできないことを、ましてやこのクラスは中学生の集団なのだ。担任である自分が責任を持ってフォローしなくてはいけなかったことだ。

いつもの流れでペアを組ませてしまったことを、牧野は軽率だったと悔いた。

保香の頭痛

突然ラジオをつけたみたいにな人の声が流れ始める。真黒な中からいつもの教室に戻ったときには、保香は夢から覚めたような気がした。一方の真人は夢を見はじめる一歩手前の状態で、すぐに気絶でもするかのように寝入ってしまった。大丈夫なのだろうか。

美那は不満げな顔で、「本当に、エインったら人の話を聞かないんだから……」とか呟いていた。美那の前世の話は面白かったから、ずっとファンタジーとして聞いていたけれど、まさか実話？ しかも相手は魔王？ いつからエイプリルフルって九月に変更になったんだっけ、と保香は混乱する。

どうしよう。期待しないでは言ったが、これは牧野に報告できる内容ではない。相手は大人だ。いくら事実でも魔王だの天使だの前世だの、さすがに信じないだろう。

このあいだまでは二年一組の人数は奇数だった。隅に座っている保香の隣の馬鹿が、保香の後ろの美那と組もうとするので、ペアワークはいつも三人でやっていた。昨日は美那がいなかったから、隣の席の石田とペアを組んだ。しかし今回は違う。

『俺は林さんと組みたいんだよ、空気読め！』

保香はテレパシーを使えるようになったらしい。目は口ほどにものを言うとはいうけれど、ここまではつきり伝わったのははじめてだ。石田も美那の言動に引いたかと思っていたが、まだ諦めていないようだ。

だが面倒くさい。教室を見回すと、やはりあぶれているのは真人だった。教室を斜めに突っ切らなくてはならない。

「保香ちゃん、わたし行こうか？」

「あー、いいよ。私が行ってくる」

「ほら、行け」

酷い言いようである。

移動よりも真人よりも石田のほうが面倒くさい。ここで美那を行かせたら後から恨み言を言われてしまう。保香は教科書を抱えて立ち上がった。

「よろしくお願いしまーす」

まだ、声が掛けづらかったのだが、なるべく軽い調子で話しかけてみる。

「……………よろしく」

返事はあった。今朝保香がまくしたてた言葉が聞こえていたのだろうか。

「朝はごめんね、ちょっと言い過ぎたの。気にしないで」

牧野に隠れてさりげなく、教科書を読んでいるふりをしながらの会話が始まった。

「無視は、ごめん。言えない事情があつて。関わり合いにならないでほしいんだ」

「うん、聞いた」

「……………は？」

「魔王様直々にね。私そういうの信じてなかったんだけど美那も一緒だったし、夢じゃなかったみたい。美那っていつも不思議な話とか考えてばかりなんだけど、嘘はつかないから、現実なんだよね」

「まだ、全然実感が湧かないんだけど。なんて保香が言ってみたら、

「……………ごめん、ホントごめん」

真人は青くなって謝ってきた。

「うん？ 別になんにも問題ないよ、魔王とか言うわりに魔王って感じじゃなかったし」

美那も言っていたし、容姿が真人だったからかもしれないが、悪い人ではないようだと思う。しかし、真人が指摘したのはそれとは

違うことだった。

「エインがどんな奴かはよく知らない、でも天使がどんな奴かは知ってる。エインなんかと直接話したら——」

人間の一人や二人死んだって気にしないわ。あんたの命だったんだじゃ済まさないわよ。保香は自称天使の言葉を思い出して蒼白になる。

「ごめん。僕が最初から無視してれば、巻き込まずに済んだのに」
もう手遅れなのか。

「——でもほら、別に悪いことしたわけじゃないし、意外と大丈夫、かも……」

自信はない。根拠もない。ただの気休めだ。

「ごめん……」

とんでもないことに、保香は巻き込まれてしまったようだった。

何も言わずとも真人のところに行ってくれた保香に、牧野は感謝してやまない。しかしそれにしても、二人が具合悪そうにしているように見えるのだが、気のせいだろうか。もしかして、本当は仲が悪いのをいろいろと無理に頼んでしまっていたのだろうか。

牧野がその後、二人の蒼白な顔の理由にたどり着くことはなかった。

ラナ・前編

むかしむかし、わたしが天使だったころ、一人の悪魔と出会ったの。わたしがラナと名乗って、人間の世界を見学しに来たときだったわ。本来なら集団で行動しなければならなかったはずだったの。でも、わたしは初めての人間の世界に目を奪われてしまった。さまざまな形の建造物、軽快に動き回る機械たち。あのときのわたしは好奇心いっぱい人間たちの作った文明の結晶を一つ残らず目に焼き付けようと必死だったのね。

でもしばらくして大変なことに気付いたの。そう、わたし、先輩の天使たちとはぐれてしまっていたのよ。それに気付いたらもう、不安で周りの景色のことなんてすっかり頭から消えちゃってたの。それから何度も先輩の名前を呼んで、もと来た道を遡って、行ったり来たり、探し回ったわ。けれど、どんなに探しても一向に見つけることはなかった。それもそのはずよね、わたし、はぐれたところを悪魔に捕まっていたのよ。私が歩き回っていたのは悪魔が作った幻想の中だったの。

悪魔はエインと名乗ったわ。息抜きに人間の世界にやってきたところで、わたしを見つけたんだって言うの。殺されると思ったわ。でもね、エインは真面目な顔でわたしにおかしなことを聞いてきたのよ。『心って何だ？』ってね。『どうやら人間は心というものを持っているらしい、だが悪魔にはない。おまえは心がどういうものか知っているか？』そんな風に。心は暖かくなったり冷え切ったり弾んだり震えたりするものなのよ、とわたしは答えたわ。

そうしたら、エインは何て言ったと思う？ 悪魔のくせに、『心が欲しい』なんて言うのよ。だから、わたしはエインに心を持ってきてあげるって約束をしたの。天使たちの住む世界には人として生まれる前の心が湧き出る泉があるから、それを汲んできてあげるよ、ってね。

逃げる口実だつて疑われたけど、絶対に戻ると何とか説得してわたしはもとの世界に戻ったの。悪魔に心を与えることがいけないことだなんて、わたし、ちつとも知らなかった。人助けのつもりだったのよ。

帰ってきたわたしのことを、みんなは心配していたわ。無事で良かった、つて口々に言われたの。でも、心を持ってすぐに戻る約束があるんだつて説明したら、先輩たちが問い詰めてきたの。『一体心をどうするつもりなんだ』つて。だから正直に答えたわ。そうしたら、すごい剣幕で『やめなさい』『悪魔は自分の持っていないものを手に入れたいだけなんだ』『そんなことをしても碌なことはない』つてみんな言うのよ。

そんなはずない、つてわたしは思ってた。きつと、心を持ったら悪魔は自分の愚かさに気付いて行動を改めるはずだ、なんて。

わたしはむきになって忠告を聞かずに飛び出していったの。

エインは戻ってきたわたしを見て呆れてたわ。

『おまえは本当におかしな奴だな』

帰ってくるとは思っていなかったみたい。私を帰してしまったあとで、やっぱり戻ってくるはずがないと思い直していたらしいの。捕まえた天使をやすやすと解放したエインだつて、充分におかしいのだから、

『あなたもね』

わたしも言い返してやったわ。

ラナ・後編

そうして、わたしはエインに心を手渡したの。

心を手に入れた後のエインはまるで別人だったわ。エインが心を飲み込んだ直後、変化は起こった。突然、顔色も悪くがくがくと震え始めたのよ。どんな悪事も厭わないはずの悪魔は、自分の過去に怯え苦しんでいたの。人間ならば、『心を入れ換える』ことができたのかもしれないわね。でも、悪魔には入れ換えるべきものがないんだもの。心はエインを苦しめるだけだったのよ。エインは立ち上がることもままならなくなってしまったの。

彼は言ったわ。『心は、これほどまでに痛いものなのか』と。『俺は今までいくつの心を踏みにじって来たのだろうか』と。

わたし、放って置けなかったの。だって、エインが苦しんでいるのはわたしのせいだったんだもの。わたしはエインを連れて人間の世界で宿を取り、付きっ切りで看病し続けた。それでもエインは次第にやつれていったわ。

あの日から二週間が経った朝、エインはわたしに正体を明かしたの。彼はただの悪魔じゃない、悪魔の国の王子、しかも第一王位後継者だったのよ。

帰らなくては、と彼は言ったわ。年老いた魔王は衰弱していてもはや長くは保たない。最後の自由だと思つて城を脱け出し、人間の世界に遊びに来たのだ。魔王が亡くなれば、すぐにでも魔力を辿つてここに迎えに来るだろう、と。

つまりね、わたしはエインにかばわれてたの。迎えの悪魔たちと鉢合わせたら、きっと命がなかったもの。

わたしは止めようとしたけれど、聞き入れやしなかった。ふらつきながらエインは起き上がったの。気力というものは、心から湧いてくるものみたいね。心は彼をあんなに苦しめたというのに、立ち上がる力をも与えてたの。

『元気でな』

彼は、ぼろぼろのはずなのに、なんともなかったかのように笑ったわ。

自らの欲望に忠実で、残虐なことを好む悪魔。目の前の彼がそれであるはずがない。わたし、そう思ったの。

心を得た悪魔は、悪魔たり得ないのよ。——わたしのしてしまったことが、どれだけ酷いことだったか、保香ちゃんにはわかる？

……わたし、ずっと気付かなかったのよ。エインに再会する、その時まで。

リウス（前書き）

基準に自信がないのですが一応注意です。

暴力表現？があります。流血しています。

グロはありません。

自己責任でどうぞ。

リウス

兄であるエインが帰って来たのは魔王の亡くなる直前だった。

——帰って来なければ良いのに。

俺は権力が欲しかった。エインさえいなければ、第二子である、この俺が次期魔王となったはずなのだ。

だが、エインは帰って来た。俺ではなく、エインが魔王となった。

新魔王は、はっきり言って、頼りなかった。俺はエインのやり方を傍らで見えて、苛立ちを禁じ得なかった。

騙し合いは良くないことだとか、人間を殺してはいけない、だなんて馬鹿げたことを言う始末。昔はもつと優秀な奴だったはずなのだ。人間の世界に遊びに行つて馬鹿になつてしまったらしい。エインはすっかり愚かな人間のようになつてしまつていた。

そんなエインに、悪魔の国を治められる訳がない。悪魔から悪事を取り上げたら何が残るというのだろう。この国に必要なものは、人間どもの苦痛に満ちた悲鳴と恐怖、そして絶望。そんな簡単なことも解らない奴に国を任せておけない。俺はそう思つていた。

ある日、エインは俺に相談をしてきた。やはりエインは馬鹿だった。いくら兄弟とはいえ、簡単に弱味を晒すとは。ところが、エインが語り出した言葉は、俺の想像を遥かに超えていた。

「もう、嫌だ——死んでしまいたい」

俺は耳を疑った。悪魔にあるまじき発言だった。それは、この世で人間だけが使う言葉なのである。

その台詞は俺の嗜虐心に火を点けた。人間じみた愚かな魔王。殺してやりたい。いたぶつて、人間のように、じわじわと。きつと、それはそれは愉快に違いない。

「ならば、死ね」

自分で死にたいと言つたのだ。文句は言わせない。これでエイン

は死に、俺が魔王となるのだ。

俺は剣を引き抜き、エインに付きつけた。

——さて、どのように殺してやるうか。

まず、右腕からが良いだろう。最初は軽く傷付けるだけだ。心臓から遠いので致命傷になることはない。だが、右は利腕。利腕に力が入らなければ、単純な力比べにおいて圧倒的に不利になる。

徐々に弱らせて、苦痛を与えてやるう。屈辱を味わわせてやるう。俺は獲物を見つけた猫のように、エインの腕めがけて斬りかかった。

エインの腰の剣はただの飾りに過ぎない。彼はぼたぼたと流れ出る血を左の手で抑えながらも、その剣を抜かなかった。

「何故剣を抜かない！」

かかってこい。その顔を憎悪で歪める。無抵抗とは、あまりにつまらないではないか。

「私は、私は、もう誰もかも傷付けたくないのだ。それに、お前は私のたったひとりの弟ではないか。お前こそ、どうして刃を向けるんだ」

エインの言い訳は、実にくだらなかった。正気じゃない。

「決まってるじゃないか。——悪魔だからだ」

そんなことも解らないのか、と俺は嘲笑してやった。そして再び斬りかかる。

エインは、困ったような、人間が『悲しい』と言うときにする表情をしていた。

「許せ、リウス」

優越感と愉悦のあまり、俺はすっかり失念していた。エインは非力な人間などではなく、悪魔であるということ。

人間は、ほとんど魔力を持たない。たとえ魔力があっても、悪魔と比べれば微々たるものだ。しかし、悪魔は強力な魔力を持つ。殊にエインは、国内有数の高度な魔術の使い手だった。——エインは魔術を発動させていたのだ。

俺は一瞬にして自由を奪われた。

「やはり、まだ死ぬのが怖いのだ……死にたくない」

血の気のない青い顔をしたエインはそう呟いただけで、殺さなかった。

その後俺は罪人として捕えられた。本来、王に齒向かう者は問答無用で死罪となる。だが、何を思ったか、エインは俺を殺さぬよう嘆願したらしい。俺は条件付きで釈放された。

その条件は二つ。死ぬまでエインの側近として付き従うこと。魔力によって行動を縛ること。つまり、エインに絶対服従ということだ。

俺にとって、それは屈辱以外の何物でもなかった。

——きつと、俺は嵌られたのだ。エインは馬鹿の振りをして相談を持ちかけ、俺を反逆者にしようとしたに違いない。あいつは陰で俺を笑っていることだろう。

俺がこの考えの誤りに気付いたのは、エインが本当に死んだ後だった。

愚かなエインは、悪魔ではなく、人間に生まれ変わってしまったのだから。

エイン（前書き）

残酷な表現あります。

エイン

悪魔の国を変えてみせる。そうすれば、これまで犯してきた過ちを償えるのではないか、と思っていた。――俺は、甘かったのだ。言葉を尽せば解ってもらえるなんて、そんなに都合良く進む訳がなかった。俺の話など、誰も聴いてはくれなかった。悪魔は所詮悪魔なのだ。異常なのは心を持った自分のほうなのだ。

体の調子はいつでも最悪だった。気だるく、眩暈が止まない。本当のところ、魔力を使わなければ起きているのがやつとなのだった。そして、心はずっと俺を責め続ける。人間にした数々の残虐な仕打。心を手に入れてしまふまで考えたことすらなかった感情が俺を苦しめる。どうして、あんな惨いことができたのか、今となっては解らない。

俺は、悪魔であることが怖かった。過去が恐ろしかった。消してしまいたかった。

死にたい、と打ち明けたら殺されかけた。血の繋がったたった一人の弟だというのに、心を許せば噛みつかれる。悪魔とはそういう生き物だった。自分もまた、あれが本性なのではないのだろうか。そうあるべきなのだろうか。

ある日、自室で休んでいると、懐かしい顔に出会った。

「ラナ……!？」

窓から侵入してきたそれは、俺に心を与えた天使だった。一体どうやってこんなところまで入り込んだのだろうか。

「エイン、会えて良かった。――逃げましょう」

彼女はそう言った。何から逃げるといいのか。判らないが、俺は彼女を信じたい。彼女は悪魔ではなく、天使だ。悪魔と天使はずつといがみあってきたが、彼女は悪魔であるはずの俺に優しくかった。

心を俺に与え、動けない俺の看病までしてくれた。

「何かあったのか？」

尋ねると、静かに答えが返ってきた。

「このままじゃ、あなた消されちゃうのよ」

泣きそうな顔だった。俺が消えるのがそんなに悲しいのか？ 俺は所詮悪魔だというのに。

ラナの話によると、天使の間で俺とラナの処分が問題になったらしい。結局、最終的な結論はこうだ。悪魔に心を与えたラナの罪は、彼女が俺を魂ごと消去することで、なかったことにする、と。

「良かったじゃないか——ほら。俺を消すだけで良いのだろう？」

天使にとって、俺を消すのは簡単だ。殺した瞬間に、飛び出した魂を捕まえて捻り潰す。天使にはそれができるのだ。

ラナは激しく首を振った。

「違うわ！ わたし、そんな酷いことできない。だって、魂ごと消えちゃうのよ。もう二度と生まれ変われないのよ。そんなの嫌だわ」
逃げよう、とラナは言った。つまり、彼女は天使を裏切るつもりなのだ。

「で——何処に逃げるつもりなんだ」

悪魔も天使も味方ではない。人間の国は広く、みつかりにくいかも知れないが、紛れて暮らすのは難しいだろう。何せ、この魔力だ。すぐに追跡される。そして、人間まで巻き込むだろう。

彼女はそこまで考えていなかったらしく、口を開けたまま、黙り込んだ。

「ラナ、俺のことは良い。お前は生き延びろ」

「嫌よ！ あなたを殺すときにはわたしも死んでやるわ。どうせ、わたし一人じゃここから帰れないもの。行きは皆、力を貸してくれただけ、帰りは独りなのよ」

ラナは俺と心中してくれるらしい。

「すまないな。俺が心を欲したばかりに」

それとも二人で逃げるべきだったのだろうか。

「いいえ、悪いのはわたしだわ。エイン、次に生まれたら二人とも人間になりましょう。きつと、今度こそ上手くいくわ」

泣きそうな顔のまま、ラナは俺に微笑んだ。

「エイン——痛いけど、少し我慢してね」

「じゃあ、また、元気だな」

また会うときは、ラナはラナではないけれど、別れの挨拶はそれだけで良いと思った。

彼女が俺の胸に刃を突き立てると、激しい痛みに襲われた。大量の血が溢れる。苦しい。まだ、——死にたくない。無意識の内に、俺は生き延びようとした。

情けないことに、殺せと言って置きながら、俺は死から逃げたかった。

その結果、俺は死に切ることができず、人間となった後も、俺の意識は膨大な魔力によって生き長らえることとなったのだ。

血まみれのラナはエインの部屋を飛び出し、大声を上げた。

「魔王は討ち取ったわ！ さあ、かかってきなさい！」

自殺した魂は転生を許されない。今死ぬには、殺されなければならぬ。

ラナはただ、殺されるために叫び続けた。

城に迷い込んだ天使をなぶり殺したりウスは、その直後エインの死を知った。

今度こそ、魔王は自分であると、ほくそ笑んだ。

——しかし、思い通りにはならなかった。

エインは、まだ消えていなかったのだ。

エインの死から数カ月。

エインの生まれ変わり——北原真人は、人間世界ですくすくと育っているのを発見された。

「くそッ——エインめ！ 人間に成り下がって、いまだに魔王だと！？ 認めん、俺は認めんぞ！」

リウスはぎりり、と歯を喰い縛った。

エインがリウスに掛けた条件という名の呪いは、未だ解けていない。

音楽室と幽霊（前書き）

携帯からでは設定できないようなので前書きに書きますが、この話から第四章『天使』となります。

音楽室と幽霊

「——という訳で、わたしは生まれ変わってここにいるの」

放課後。昼の陽射しも和らいで、だいぶ涼しくなってきた。窓を開けてもまだ埃っぽい空気に満ちた音楽準備室で楽器を漁りながら、保香は美那の話を聞いていた。ラナとエインの出会いから、その死までの物語を。

「正確に言えば、ラナはわたしじゃないの。そりゃあ、同じ魂なのだから共通の部分も多いわ。でもね、わたし、心中には反対なの」
美那はクラリネットのケースと新しいリードをしっかりと抱いて保香に微笑んだ。

「だって、次に生まれたとき、同じ人を好きになる訳じゃないのよ。ラナはエインが好きだったみたいだけど、わたしは違うもの」

すました顔で美那は断言する。他に好きな人でも出来たのだろうか。

「そういうもののなの？」

「うん、自殺したら生まれ変われないし、本当の心中なら片方しか生まれないでしょ」

片方しかいなければ両想いにはならない。それもそうである。生まれ変わっても互いに好きであるというのは、幻想なのかもしれない。

保香はトランペットのケースを開け、中身の確認をする。学校の備品は、たまに中身が不足している。マウスピースが入っているのを視認して、蓋を閉じた。今日は顧問の教師が不在のため、本当は休みなのだ。なのに保香たち二人は、個人的に練習するという口実で鍵を借り、音楽準備室でこうして過ごしている。何故かという理由は少し前に遡る。

『そう言えば——大谷さんって、なに部？』

英語のペアワーク中、気まずい空気を変えたかったのか、真人が唐突に聞いたので、保香は素直に『吹奏楽』と答えた。

『——じゃあ、そこにすることにする』

ノートの下からするりと書類を引っ張り出し、やる気無さげに真人が言う。その書類には『入部届』とある。見学もせずに決めて良いのかと聞くと、『きっとまたすぐに転校になるし、どうせ幽霊だよ』とかなり消極的な返事を寄越したのだ。

部活をやるのならば、どうせなら楽しんで参加してほしい。かと言って、強引に連れていかれて楽しいはずがない。保香には、真人に無理矢理見学させるつもりはなかったのだが。

英語の授業後、そのことに対して、美那に愚痴を溢したのが発端だった。彼女はきらりと目を輝かせる。

『絶ッッ対、今日は部活を見学して貰わなきゃ！』

そして、美那は驚異の押しの強さをもって、真人に約束を取りつけたのだった。

保香と美那はそれぞれ楽器を携える。音楽室に並ぶ机のひとつにケースを置きつつ、美那が続けた。

「わたしはね、真人くんが心配。心はひとつだけなのに、自分の意識も、エインの意識も混在してる。あのままじゃ、エインも真人くんも『人間でもない悪魔でもない存在』から抜け出せないわ」

「……真人くんが？」

真人は普通の人間ではないのか。保香は意外に感じた。

「だって、二つの人格に心がひとつしかないのよ？ 多分今はまだ人間寄りだけどね。このまま悪魔の影響を受け続けたらまともでいられるほうがおかしいわ——だから、お節介かも知れないけど、真人くんにお話しなきゃと思ってるの」

それで、あんなに積極的な行動に出たのか。保香は納得する。——つまり、だ。吹奏楽部の今日の活動は楽器の演奏よりも、美那の「お話」がメインなのだろう。部員も二人しかないのだし。

「さて、と。真人くん呼びに行こっか。保香ちゃん、準備オツケー？」

保香は思う。もしかして、準備とは楽器のことではなく心のことだろうか。楽器を準備する間、美那がラナの物語を語っていたのは、保香に状況を説明し、気持ちの整理をつけさせるためだったのではないだろうか。

「うん、大丈夫。行こう」

保香は一息おいてはつきりと返事し、美那と共に音楽室を後にした。

放課後の屋上

教室に、真人はいなかった。

室内はがらんとしていて誰一人見当たらない。大抵は皆、部活の時間だ。グラウンドを見遣ると、野球部がウォーミングアップをしていた。

「真人くん、いないね。帰っちゃったのかな」

運動部の喧騒に混じる美那のため息。

カラスが一羽、ばさばさと窓の外を飛んでいく。そして、上に向かってまた一羽。保香にひとつの閃きが降りてきた。

「もしかして、屋上じゃない」

美那は目を丸くしていた。そして、ゆっくりと頷く。

「保香ちゃんが言うならきっとそうだね。行ってみよう」

扉の外には黒い絨毯じゅうたんが広がっていた。

「うはあ、すごいカラス」

屋上には、たくさんのカラスに囲まれた真人がいた。

美那はカラスの群に突っ込んでいき、くるりと回る。保香が前に屋上へ来たときには一斉にいなくなったカラス達も、美那から少し距離を置くだけで離れていかない。なんだか楽しそうだ。

「やっぱりカラスって頭良いよね」

と、美那。

「ちょっと怖いけどね」

保香は付け加える。おそろおそろと一歩踏み出すと、カラスは真人の側に逃げていった。美那と何が違うというのだろう。

「たぶん、大谷さんが怖がってるのが伝わってるんだよ」

真人が指摘する。

「遠慮してくれてるの？」

保香が尋ねると真人は笑った。

「案外そうかも」

真人が何故教室ではなく屋上にいたのか、それには理由があった。真人が教室に一人でいると、カラスが集まってくる。しかし、動物を学校に連れて来てはいけなく、と校長に言われたことがあるらしい。屋内で見つかれば大変なことになる。だから、屋外に出ることにしたそうだ。

真人の話が一段落着くと、誰もいないしここなら良いかな、と呟いて美那が話を切り出した。

「今日、部活の見学に誘ったのは、どうしても伝えたいことがあったからなの」

保香がさっき聞いたのと同じ美那の前世の物語と、状況の説明。

——そして、ひとつの忠告。

「人間として生きなければ、エインを殺さなくてはいけないのよ、真人くん」

保香は息を飲み、真人が眉を顰めた。

悪魔と天使

「殺すだなんて、そんな」

一歩踏み出て保香は抗議する。美那はラナとは別人で、エインを好きでもなんでもない。だからといって、簡単に殺すなんて言うて良い訳がないはずだ。

「これは、そういう問題じゃないの。それに、真人くんがこのまま
でいいなら無理にとは言わないわよ。真人くんはどうしたいの？」

美那が真人に目を遣る。

「それは——っ」

真人が口を開いたその瞬間、足元からざわりと風が舞い上がった。制服のスカートが揺れる。まだ陽が出ているにも関わらず冷たい風が背筋を撫で、保香に急な頭痛を引き起こす。これがエインの魔力によるものだと、保香には漠然と判った。

「何故だ、俺は真人を守ってやっているのだ」

そこにいたのは真人ではなかった。心なしか声が低く、苛立ちを含んでいる。

「お前の目的は何だ。ラナもお前が殺したのか？」

エインが美那に掴みかかる。美那はエインから一ミリも目を離さない。

「放しなさいよ馬鹿」

いつになく言葉が乱暴だ。

「ちよつと、落ち着いて」

保香が止めに入ろうとしたが、その必要はなかった。唐突に幼い少女の声が降ってきたのだ。

「その二人！ 離れなさいっ！ そいつは魔王よ」

いつの間に現れたのか。顔を上げれば、給水タンクの上に声の主が仁王立ちしているのが見えた。昨日の物騒な天使少女だった。

彼女は白いワンピースをはためかせながら軽やかに飛び降りる。

屋上にいたカラスたちが、慌ただしく飛び去っていく。

エインは、ばつが悪そうに顔を歪め美那を解放した。

「魔王に喧嘩売るなんて、良い度胸じゃない。あたしが来てやらなきゃ死んでたわよ」

少女は見下した態度で喋る。感謝されて当然とでも言いたげだ。

「あたしが今すぐ魔王を消してあげるんだから感謝しなさいよね」

少女は楽しみに笑う。

「またお前か、フルア。いい加減に諦めろっ」

エインが言うと、フルアと呼ばれた少女は何がおかしいのか尚大きく笑った。

「なんて愚かなのかしら。さすが、下等生物ね。私たちがこれまで手加減してあげてたのがわからないの？　いくら魔力が強くても所詮体は人間なのよ。攻撃を避けきれなければさっくり死ぬの。何も小さい事故に見せかける必要はないのよ。大きな事件だっていいの。例えば原因不明の大爆発とか無差別大量殺人とか。ね？　簡単でしょ」

どうやら、保香や美那だけでなく、その辺りの人間を巻き添えにするつもりのようなのだ。

「周りを巻き込むなと何度言えば分かる」

そういえば、エインは真人が悲しむのは嫌だと言っていた。それがどこまで本気が保香には判らないが、少なくとも殺人は嫌っているようだった。

「どうしてあたしがあんたの要望聞かなきゃなんないのよ。おとなしく殺されてくれれば巻き込まないわ。どうせ死ぬんだから関係ないでしょ」

対するフルアの返答は実に冷徹だった。

「だから言ったのよ、エイン。このままだと真人くんごと殺されちゃうでしょ、それでいいの？」

いくら逃げても彼らは付きまとう。たとえここでフルアを殺しても、次から次へ天使が送り込まれるだけだ。

美那の問いに、エインはただ唸るだけだった。

魔術を使うための動作だろうか。天使フルアが手を振り上げた。それとほぼ同時に爆発音が響き、保香の視界が霞んだ。美那が少し吹き飛ばされ、バランスを崩して肘や膝を打ち付けたのが目に入る。保香も尻餅を突いて、手と尻がじんじんと痛い。熱かったので、たぶん掌をすりむいている、と思った。

「痛……っ」

だが、誰一人死んでなどいない。保健室で簡単に手当てできる怪我止まりだ。

ただ、擦れて台無しの白いワンピースを着た少女は、頭を打ったらしく気絶していた。静かに目を瞑ったまま微動だにしない。保香は少し心配になる。いくら命を取られかけた相手でも、もし打ち所が悪かったなら可哀想だ。

「危ないところでしたね魔王様？」

そして、真人の隣には保香の知らない男がぴつたりと寄り添っていた。

カラスと悪魔（前書き）

暴力表現があります。

残酷な描写…… かもしれません。

カラスと悪魔

先程の衝撃で気を取り戻したらしい真人が、黒マントの男に声をかける。

「……リウス？」

「他の誰に見えるというんですか」

どうやらリウスというらしいその男は不機嫌そうに眉間に皺を寄せた。真人も、あまり嬉しそうには見えない。

「助けてくれて、ありがとう」

「当然のことです。あなたは魔王なのですから」

どこか含みのある言い方だった。魔王でさえなければ助けたりはしない、と。

「ご心配には及びません。邪魔なクズどもはわたくしが始末しまし
よう」

「始末なんかしないでいい。手当てをしてくれないか」

間髪入れず、真人が却下する。だが、リウスも食い下がった。

「今回ばかりは従うわけにはいきませんね。人間や天使など消えた方がいいのです。ましてや、こいつらはあなたの秘密を知りすぎています。これはあなたのためなのですよ」

「僕のため？ そんなことされても嬉しくない」

真人が苦い顔をする。

「そうですね。それではあなたは殺されても構わないということな
んですね？ 違うでしょう？ わたくしめにはあなたをお守りする
義務があるのです。みすみす天使に殺されては敵いません」

リウスはどこか芝居じみた台詞を滔々と繰り返す。

「だからそうじゃなくてっ——」

真人の言葉はリウスに届かない。

「あいつらを生かしておくことは、わたくしがあなたを殺すくらい
有り得ないことです。やつらはあなたを傷付けようとした。王に齒

向かうものは死罪。わたくしも、あなたには逆らえないのですから――」

リウスの台詞は流れるままに、続いた。ついに、リウスに対抗して真人が声を荒げる。

「殺しちや駄目だつて言ってるじゃないか。もしこの人達を殺すなら、その前に僕を殺せ。リウスは僕を殺せないんだろ？」

その言葉を聞いた瞬間、リウスは満足気な表情を浮かべ、慇懃無礼に深々と頭を下げた。

「どうも、ありがとうございます。わたくしはそのお言葉を待っていたのですよ魔王様」

顔を上げたリウスの眼光が、真人を突き刺す。

「――！」

驚きで硬直する真人を地面に叩き伏せ、リウスはその首に手を掛けた。

「放——つぐ」

真人が言葉を紡ぐことができないように力を込めたらしかった。

「命令さえくだれば、魔力に縛られたわたくしでも殺せるんですよ……愚かな魔王様。あなたが死ねば権力が手に入る。次の魔王は俺だ。人間に成り下がった愚かなやつに仕える必要などない。天使どもに殺させようかとも思ったが、自分で手を下すほうがいい。お前の苦しみに歪んだ顔がこんなに間近で見られるのだからな」

このままでは真人が殺されてしまう。保香がどうにかするしかなかった。美那は足を挫いたらしく、座りこんだままだったのだ。保香は気付かれないようにゆっくりと立ち上がってリウスと呼ばれる悪魔に飛びかかる体勢を整えた。焦りは禁物だ。幸運にも、リウスは真人の首を絞めることに夢中で保香に背を向けていた。たとえ非力な女子中学生でも、その手を止めることくらいならできたかもしれない。

しかし、できなかった。なぜならば、不意に屋上に乱入してきた

者がいたからだ。

かちゃん、と音がしてリウスが顔を上げた。保香も目を凝らす。

「その手を離しなさい！　うちの生徒になんてことしてるのよ」

「誰だ、お前はっ！」

リウスが狼狽して喚いた。真人が息を詰まらせて、むせる。どうやら真人は助かったらしい。

「私？　大山史よ。この学校で教師やってるの」

屋上への扉を開いたのは、大山史その人だった。美那が驚愕の声を上げる。

「大山先生、どうして……！」

大山は一步步みよりながら語り出す。その様子にはリウスは警戒を強め、その手からはもう力が抜けていた。

「私もカラスと友達だから、カラスに話を聞いて来たの。ほんとに賢いわね、カラスって。私に頼みに来たのよ、真人くんを助けてくれ、ってね。でも、残念ながら私全然強くないのよ。運動もそこそこ、特殊な能力といったって動物と話ができるくらいだわ。だから、カラスの代わりに作戦を練って来たの」

そこで足を止め、大山が指を鳴らす。

——すると、どこからともなくカラスの大群が飛んできてリウスにまとわりついた。

「うわ、何をする離れろ」

リウスは真人から手を離しカラスを払おうとした。しかし、カラスは次から次へと現れて止まない。いくら小さい生き物とはいえ、大群だ。それは圧倒的な数の暴力だった。対するリウスは魔術を使う余裕すらないのだろう。ただ腕を振りかざし、カラスを殴りつけるのみ。

「ああ、ほんと羨ましいわ。餌付けごときじゃ、なびかない訳よねえ」

保香は大山の隣で、その光景を見ていた。

我が身を呈して真人を守ろうとしているカラスたち。彼らは、そ

れほどまでに真人が好きなのだろう。

ああ、そうか。と保香は気付く。カラスたちは真人に対し悪意も恨みもなかったのだ。ただ、好きだから傍にいただけだったのだ。そのことが真人から人を遠ざける一因となっていたとは、さすがのカラスも知らなかったようだ。保香はカラスを少しだけ、好きになれた気がした。

その後リウスが力尽きて倒れるまで、カラスたちのほとんど一方的な攻撃は続いた。

夕方の保健室

その日の保健室の光景は異様だった。小さな女の子と男に二台のベッドを占領され、軽い怪我の三人の生徒がソファでおとなしく座っている。頭に軽い打撲のある男子生徒、擦り傷だらけの女子生徒二人、うち一人は足を捻挫しているようだ。そして、羽をむしりとられたカラスが数羽。

「大山先生、屋上で一体何があったんですか。この子とこの男は誰なんです！」

養護教諭は問いつめたが大山からはまともな答えは返ってこなかった。

この男子生徒、北原真人がカラスを殺した事件は彼女も聞き知っている。しかし、彼はカラスのことを心配しているようだ。そのうえ、打撲、そして首には締め付けられた跡のようなものまである。カラスたちの手当てを頼んだのも真人だった。

それにしても、どうしてこんなに怪我人だらけなのだろう。何故屋上に部外者が二人もいたのだろうか。

大山の答えは妙なものだった。

「ちよつと悪魔と天使のいざこざに巻き込まれたの。その二人は人間じゃないらしいわ。目が覚めたら暴れるかもしれないから気を付けてね」

「人間じゃないとか、テンシとかアクマってどういうわけですか」

「本人に聞いたほうが早いわ」

心療内科を紹介しろ、という意味だろうか。ああ。胃が痛い。養護教諭は腹をさする。

「大山先生、しばらく様子見ててください。お手洗いに行って来ます」

「……大丈夫ですか？」

彼女は青い顔で大山に断りを入れ、よろりと席を立った。

養護教諭が出ていつてから十分。彼女はいまだに戻って来ない。保香は心配になってきた。トイレで倒れていなければ良いが。

ちょうどその頃、フルアが目を覚まし、騒いでいた。ベッドで横になったまま布団をきつく掴みながら、金切り声を上げるフルア。

「何故あたしを生かしておく？ 殺すなら早く殺せ、魔王め！」

「殺さないよ」

真人がなだめるように言った。フルアは真人の姿を確認し、焦つてがばりと身を起こした。

「エイン——あんた魔力はどうしたのよ！」

「僕はエインじゃない。それで、魔力つて」

真人が聞き返す。

「エインは魔力で生にしがみついていたはず——でも、今のあんたからはもう悪魔の魔力を感じないの」

フルアは戸惑いを見せていた。これまでこんなことはなかったに違いない。

「じゃあ……エインは」

「死んでしまったみたいね」

彼女はため息を溢した。

「やつぱり、そうなんだ。さっき突然、記憶がなだれ込んできたからもしかしてとは思ったけど」

フルアが、ばふんとベッドを叩きのめす。

「訳分かんないわ。エインは人間の人生を乗っ取ろうとしてたんでしょう？ どうしていきなり自殺なのよ」

フルアの解釈はたぶん、間違っていた。だが、訂正してやる必要もないだろう。エインはもういないのだ。

「まあ、いいわ。自分から悪魔であることを止めたことに免じて今回は見のがしてあげるけれど、これ以上悪魔の魂を持って生まれ変わることは許されないわ。せいぜい、悔いのないように生きるとね」

「——お別れくらい、してくれてもよかったのに」
ようやく、美那がかすれた声で呟く。

フルアは人の話を聞かず延々と喋り続ける。

「それから、悪魔どもはこのあたしが成敗してやるんだから、安心して魔王の座から降りなさい。ただの人間ごときに魔王は務まらないわ。倒し甲斐がないもの！」

倒し甲斐を求めて良いものなのだろうか。保香がそんなことを思っている、何も言わずフルアの姿は忽然と消えていた。

リウスは目覚めてすぐに絶叫した。その視線の先では大山がにこにこ笑みを浮かべてリウスに手を振っていた。余程トラウマになったとみえる。

そのリウスに、真人が駆け寄る。

「リウス、平気？」

「……」

返事はない。

「魔王になりたかったんだろ？　これからエインの代わりをお願い。さあ、行つて。エインは死んだんだ」

リウスは驚いた表情のまま、しばらく硬直していた。そして、腹を抱えて笑い出す。皮肉や中傷というよりただおかしくて笑っているようだった。

「お前は、あいつ以上の馬鹿だ」

あいつとは、エインのことだろう。何があつたのかは知らないが、楽しそうだ。悪魔でも、笑うことはあるらしい。

「こんなに笑つたのは久しぶりだ。反逆者は死罪、そう言つたはずだ。俺がやったことを他の奴に告げれば俺なんざ簡単に始末できる。それを——その俺に王位を譲るとは」

それから、しばらくくすぐすと震えていたが、落ち着きを取り戻すと一言、

「それでは——また」

そう言い残してリウスもまた、姿を消した。

「いやー、すみません。牧野先生が心のケアに興味をお持ちのようで、引き止められてしまいました」

申し訳なさ気に養護教諭が戻って来たのはその後だった。とりあえず無事で良かったと保香は思う。

ふとベッドに目をやり、養護教諭は不思議そうに首を傾げた。

「あれ、あの二人は」

「なんの話ですか」

堂々と大山がしらを切る。

「あの、訳のわからない女の子と男ですよ！」

「それがどうしたんですか」

「え？ ベッドに二人、いましたよね！」

ついに彼女は泣きそうな顔で保香たちに助けを求めた。彼女には申し訳ないが大山に話を合わせ、三人は苦笑した。

保健室から出る直前。

「大谷さん」

保香は後ろからふいに呼び止められた。覚えてないと思うけど、と前置きして真人が謝罪した。

「ごめん」

何故謝られたのか。保香には推測することしかできなかった。

大山は、カラスの群れのご真ん中にいた。

「あなたたちね、好きなのは良いけど、いい加減に北原くんにとわりつくのはやめなさいよ」

しゃがんで一羽一羽と視線を合わせ、話を続ける。

「大谷さんが言ってたわよ、あんまりにもベツタリくっついてるから話し掛けづらいって。だから、北原くんとは少し、距離を置いてちょうだい」

カラスは大きな鳴き声を上げて飛び去っていく。その様子を、大
山は見上げて手を振った。

「また、遊びに来なさいよね！」

その日を境に、真人の周りからカラスはいなくなった。

下校時間と帰り道

一週間が経った。

職員室の片隅のテレビが、交通事故を映しているのを見てふと、牧野は思い出す。事故、といえば――そうだ。

「大山先生！」

牧野が叫んだ。

「死者なんか一人も出なかったじゃないですか」

北原真人はつい先日、また転校していつてしまった。理由は、家庭の都合だという。あまりにも移動が多いようならば、と大山は寮のある学校を紹介したそうだ。県内にあるらしいのだが、牧野は聞いたことすらない校名だった。それが大山の母校だというのだからさらに怪しい。

「……にしても、早すぎますよねえ。十日ですよ。まだ部活の登録届の期限すら終わっていないのに」

牧野はため息をつく。

真人は、律儀に届を出して行った。牧野の手元には、吹奏楽部と記入された紙が残っている。

「牧野先生。ここだけの話、実は出たのよ。死者が」

そんな話をしながらも、大山はうふふと笑っている。

「えっ、ま、まさか学校側で隠蔽したとかじゃないでしょうね!？」

ぎょつとして牧野は大山を問い詰めた。吹き出す大山。

「あはは、違いますよ。何ですかその発想。肉体的な死じゃないから発表も何もないだけ。死んだのは、真人くんの中のもう一人よ。魔王は死んだの」

「またその話ですか」

どこから仕入れた噂だろうか。牧野は呆れつつ、大山の嘘か本当か判らない言動に耳を傾けた。

「なんか——」

保香は学校からの帰り道にいた。

あれから最早一週間。あの頃の出来事は、現実の世界から離れて、既に遠い日の記憶になりつつある。

「あれは夢だったんじゃないかなあつて感じがする」 それを聞いた美那はにっこりと笑って夕空を見上げる。

「全部、現実を起こったことだよ。真人くんのこと、ラナのことも」

遠い昔の記憶を美那はちゃんと覚えている。たぶん、あの出来事は保香にも忘れられない。

「良かったよね、真人くん、普通の人間になれて」

「……うん。それは良かったと思うんだけどね。真人くんは人間になれたけど、エインは死ぬまですつと悪魔のまま……可哀想なことしちゃったなあ」

数歩先を歩いていた美那はくるっと振り向いて保香に笑いかけた。「でもね、ラナはラナ、わたしはわたし！ わたしは普通の人間の林美那だから！ ラナはエインに好意を持っていたけどわたしは違うもん」

美那が胸を張るしぐさをする。

「ねえ保香ちゃん」

「何？」

保香は笑いながら美那の隣に並んで歩く。

「二組の小宮くんって格好良いと思わない？」

二人に日常が戻ってきた。笑い声が、夕方の街に響いた。

——非日常のファンタジーはこれでおしまい。天使や悪魔とは無縁の学校生活がまた、始まる。

【完】

下校時間と帰り道（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8009p/>

カラスと悪魔

2011年10月5日03時11分発行